



MINISTÈRE
DE L'ÉDUCATION
NATIONALE

EBE JAP 1

SESSION 2018

CAPES CONCOURS EXTERNE

SECTION : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES LANGUE ET CULTURE JAPONAISES

COMPOSITION EN JAPONAIS

Durée : 5 heures

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : *La copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.*

Tournez la page S.V.P.

次の4つの資料を用いて上記のテーマに沿った問題をあなたなりに設定し、それについて論じなさい。論文は全文日本語で書き、論旨展開の明快さに留意しなさい。

資料1：

三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負い、この上高地の温泉宿から穂高山へ登ろうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川を溯る外はありません。僕は前に穂高山は勿論、槍ヶ岳にも登っていましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登って行きました。朝霧の下りた梓川の谷を——し
5 かしその霧はいつまでたっても晴れる気色は見えません。のみならず反って深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思いました。けれども上高地へ引き返すにしても、兎に角霧の晴れるのを待った上にしなければなりません。と云って霧は一刻毎にずんずん深くなるばかりなのです。
10 「ええ、一そ登ってしまえ」——僕はこう考えましたから、梓川の谷を離れないように熊笹の中を分けて行きました。

しかし僕の目を遮るものはやはり深い霧ばかりです。尤も時々霧の中から太い毛生樺や樅の枝が青あおと葉を垂らしたのも見えなかった訣ではありません。それから又放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれ等は見えたと思うと、忽ち又濛々とした霧の中に隠れてしまうのです。そのうちに足もくたびれて来れば、
15 腹もだんだん減りはじめる、——おまけに霧に濡れ透った登山服や毛布なども並み大抵の重さではありません。僕はとうとう我を折りましたから、岩にせかされている水の音を便りに梓川の谷へ下りることにしました。

僕は水ぎわの岩に腰かけ、とりあえず食事にとりかかりました。コオンド・ピイフの缶を切ったり、枯れ枝を集めて火をつけたり、——そんなことをしているうちにか
20 れこれ十分はたったでしょう。その間にどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンを噛じりながら、ちょっと腕時計を覗いて見ました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か気味の悪い顔が一つ、

円い腕時計の硝子^{ガラス}の上へちらりと影を落としたことです。僕は驚いてふり返りました。すると、——僕が河童^{かっぱ}と云うものを見たのは実にこの時が始めてだったのです。僕の
25 後ろにある岩の上には画^えにある通りの河童が一匹、片手は白樺^{しらば}の幹を抱え、片手は目
の上にかざしたなり、珍しそうに僕を見おろしていました。

僕は呆^あっ気^けにとられたまま、暫^{しば}くは身動きもせずにいました。河童もやはり驚いた
と見え、目の上の手さえ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いか、岩の上の
河童へ躍りかかりました。同時に又河童も逃げ出しました。いや、恐らくは逃げ出し
30 たのでしょう。実はひらりと身を反^{かえ}したと思うと、忽ちどこかへ消えてしまったので
す。僕は愈^{いよいよ}驚きながら、熊笹の中を見まわしました。すると河童は逃げ腰をしたな
り、二三メートル隔った向うに僕を振り返って見ているのです。それは不思議でも何
でもありません。しかし僕に意外だったのは河童の体の色のことです。岩の上に僕を
見ていた河童は一面に灰色を帯びていました。けれども今は体中すっかり緑いろに変
35 っているのです。僕は「畜生！」とおお声を挙げ、もう一度河童へ飛びかかりました。
河童が逃げ出したのは勿論です。それから僕は三十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を
飛び越え、遮^し二無^じ二河童を追いつづけました。

芥川龍之介『河童』1927年（新潮文庫、2002年）

資料2：

水にしても、空気にしても、すべて流れは乱流をひきおこす。その乱流の最小波長
が、沙漠の砂の直径に、ほぼ等しいというのである。この特性によって、砂だけが、
とくに土のなかから選ばれて、流れと直角の方向に吸い出される。土の結合力が弱け
れば、石はもちろん、粘土でさえ飛ばないような微風によっても、砂はいったん空中
5 に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。
どうやら、砂の特性は、もっぱら流体力学に属する問題らしかった。

そこで、さきの定義につけ加えれば——

《……なお、岩石の破砕物中、流体によってもっとも移動させられやすい大きさ
の粒子。》

10 地上に、風や流れがある以上、砂地の形成は、避けがたいものかもしれない。風が吹き、川が流れ、海が波うっているかぎり、砂はつぎつぎと土壌の中からうみだされ、まるで生き物のように、ところきらわず這^はってまわるのだ。砂は決して休まない。静かに、しかし確実に、地表を犯し、亡^{はろ}ぼしていく……

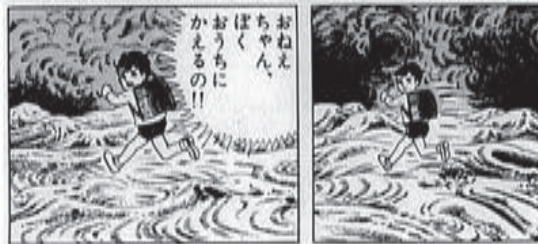
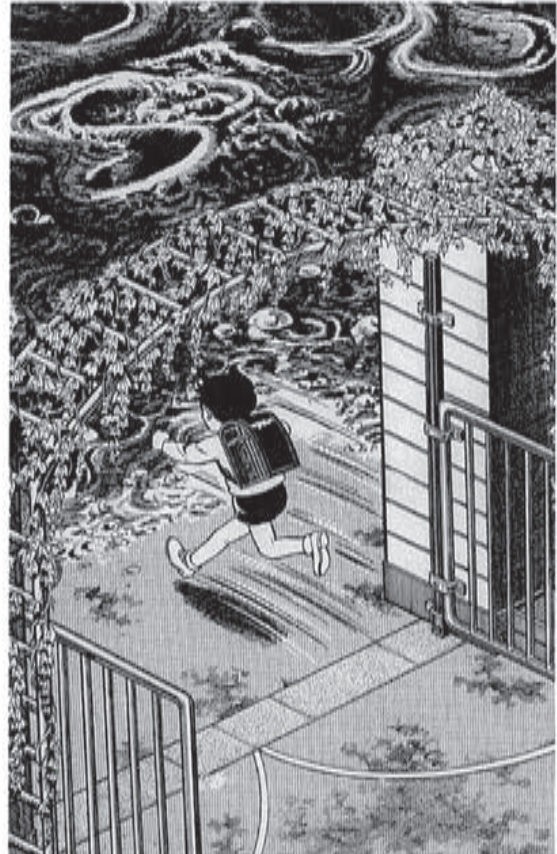
その、流動する砂のイメージは、彼に言いようのない衝撃と、興奮をあたえた。砂の不毛は、ふつう考えられているように、単なる乾燥のせいなどではなく、その絶えざる流動によって、いかなる生物をも、一切受けつけようとしない点にあるらしいのだ。年中しがみついていることばかりを強要しつづける、この現実のうっとうしさとくらべて、なんという違いだろう。

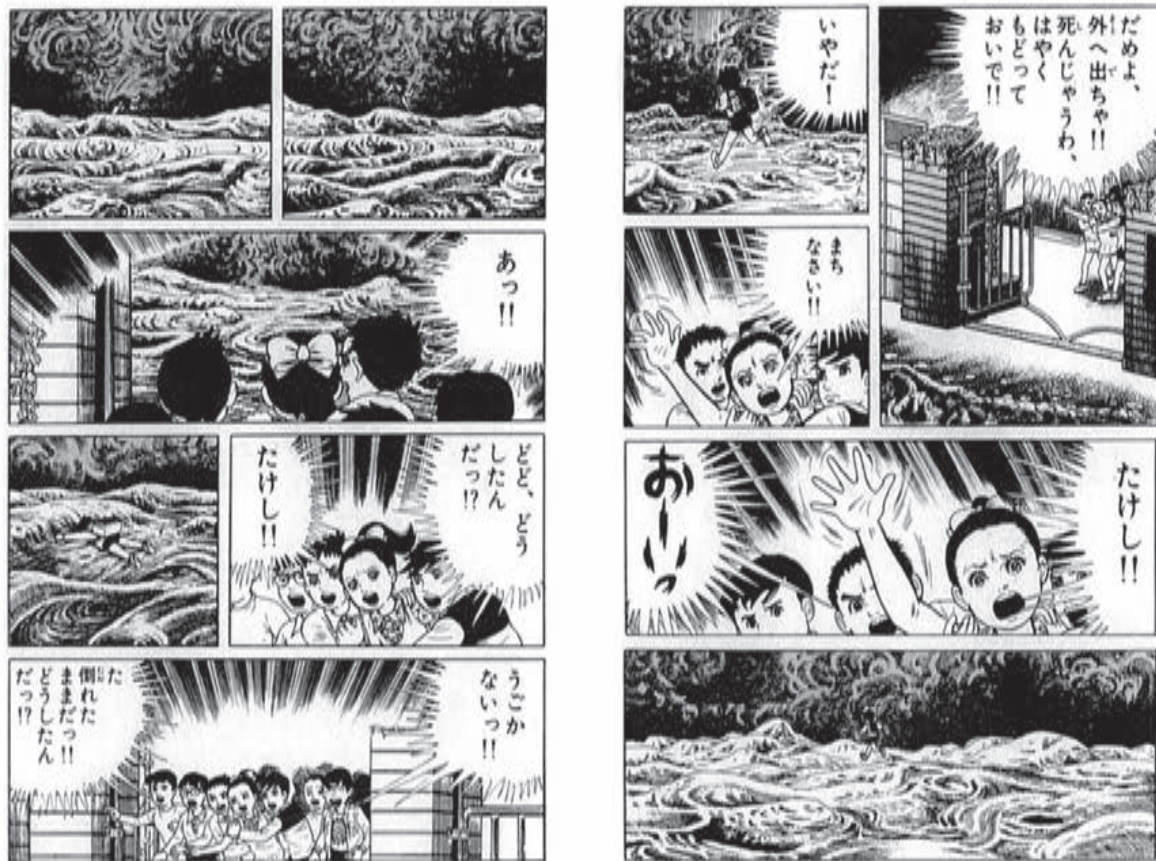
たしかに、砂は、生存には適していない。しかし、定着が、生存にとって、絶対不可欠なものかどうか。定着に固執しようとするからこそ、あのいとわしい競争もはじまるのではなかろうか？ もし、定着をやめて、砂の流動に身をまかせてしまえば、もはや競争もありえないはずである。現に、沙漠にも花が咲き、虫やけものが住んでいる。強い適応能力を利用して、競争圏外にのがれた生き物たちだ。たとえば、彼のハンミョウ属のように……

25 流動する砂の姿を心に描きながら、彼はときおり、自分自身が流動しはじめているような錯覚にとらわれさえするのだった。

安部公房『砂の女』1962年（新潮文庫、2016年）

資料3：(sens de lecture japonais)





椋岡かずお、『漂流教室』1972-1974年
 (小学館、1990年) 第1巻168~173ページ

資料4：

エレベーターはきわめて緩慢な速度で上昇をつづけていた。おそらくエレベーターは上昇していたのだろうと私は思う。しかし正確なところはわからない。あまりにも速度が遅いせいで、方向の感覚というものが消滅してしまったのだ。あるいはそれは下降していたのかもしれないし、あるいはそれは何もしていなかったのかもしれない。

5 ただ前後の状況を考えあわせてみて、エレベーターは上昇しているはずだと私が便宜的に決めただけの話である。ただの推測だ。根拠というほどのものはひとかけらもない。十二階上って三階下り、地球を一周して戻ってきたのかもしれない。それはわからない。

そのエレベーターは私のアパートについている進化した井戸つるべのような安手で
10 直^{ちよくせつてき}截的なエレベーターとは何から何まで違っていた。あまりにも何から何まで違って
いたので、とてもそれらが同一の目的のために作られた同一の機構を持つ同一の名を
冠^{かん}せられた機械装置だとは思えないくらいだった。そのふたつのエレベーターはおよ
そ考えられうる限りの長い距離によって存在を遠く隔てられていたのだ。

まず第一に広さの問題だ。私が乗ったエレベーターはこぢんまりとしたオフィスと
15 しても通用するくらい広かった。机を置いてロッカーを置いてキャビネットを置き、
その上に小型のキッチンを備えつけてもまだ余裕がありそうである。ラクダを三頭と
中型のやしの木を一本入れることだってできるかもしれない。第二に清潔だった。新
品の棺桶^{かんおけ}のように清潔である。まわりの壁も天井もしみひとつくもりひとつないぴか
20 ぴかのステンレス・スチールで、床には毛足の長いモス・グリーンカーペットが
敷きこんである。第三におそろしく静かだった。私が中に入ると音もなく——文字ど
おり音もなく——するすると扉^{とびら}が閉まり、それっきり何の音も聞こえなくなった。停
まっているのか動いているのかもわからないくらいだった。深い川は静かに流れるの
だ。

もうひとつ、そこにはエレベーターというものが当然装備していなくてはならない
25 はずの様々な付属物の大半が欠落していた。まず各種のボタンやスイッチの類^{たぐい}を集めた
パネルがない。階数を示すボタンもドアの開閉ボタンも非常停止装置もない。
とにかく何もないのだ。そのために私は非常に無防備な気持になった。ボタンばかり
ではない。階数を示すランプもなく、定員や注意事項の表示もなく、メーカーの名前
を書いたプレートさえ見あたらなかった。非常用の脱出口がどこにもあるのかもわか
30 らない。たしかにまるっきりの棺桶^{かんおけ}だった。どう考えてもこんなエレベーターが消防
署の許可を得られるわけではない。エレベーターにはエレベーターのきまりというもの
があるはずなのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

1985年（新潮文庫、1996年）

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B E	0 4 3 0 E	1 0 1	7 8 2 1